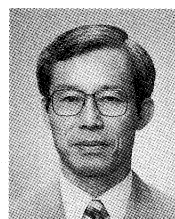


スケールの大きな研究を目指そう

大阪大学大学院理学研究科教授 楠本正一
Shoichi Kusumoto



研究は研究者の個性に基づく創造的活動である。研究者の卵の時代には、先生や先輩から与えられたテーマに取り組み、折に触れて研究の進め方を習うことから始めるのがふつうであるが、その時にも本人のもつ意識が研究のスピードはもとより、その展開にも大きく影響する。

そのような過程を経て自分で研究テーマを選べるようになる時期は人によってそれぞれであるが、やはりそこで大事なことは大きな研究に発展するテーマを選ぶことではないだろうか。研究は人が思ったように進まないのがふつうであるから、最初から将来の発展が期待できるテーマを選ぶことはそう簡単ではないし、天才でもなければいきなり大きな研究をすることはできないだろう。しかし、そのように心がけていることが大事である。

後から見て大きく発展している魅力的な研究は、そのほとんどが当時は誰もやっていたなかった研究である。大きな賞の選考の場などで、しばしば話題になり、魅力的なのは「新しい分野をつくった」研究である。「他人のやっていない研究」はテーマを選ぶときのキーワードのひとつであるだろう。

新しい分野を拓くには、これまでに発展している分野から飛び出すか、あるいは他分野との境界領域の研究を目指すことである。新たな発展はいわゆる学際領域で始まることが多いのはよく知られているとおりであり、2つの分野の考え方を結びつけることによって思いがけない展開が生まれてくる。それを実現するためには、普段から幅広い興味を持って、異分野の研究にもアンテナを張っておくことが大切である。若者は早くから自分に枠をはめないようにして欲しい。しかし、そこで注意しなければならないのは、ある分野では常識のようなことでも別の分野では物珍しがられることがあり、それに甘えていたのでは、いつの間にか「鳥なき里の蝙蝠」になってしまうおそれがあるということである。私たち自身も境界領域の研究を長く続けてきたが、合成をする場合には合成化学としても常にトップレベルの研究をしたいと念じてきた。自分自身の研究上のアイデンティティをはっきりさせておかねば「どっちつかず」に陥って、大

きな仕事には発展しにくいのではないだろうか。

研究を始めるときに、成果を期待するのは当然であり、それが予測できるものの方が取っつきやすい。日本の有機生物化学、生化学の大先達である赤堀四郎先生が若い日を回想して書いておられた文章に次のような話があった。ある時、ご自身の先生であった真島利行先生（本協会初代会長）から自分のこれからの研究テーマを考えてくるように言いつかった。勇躍して図書館にこもって勉強し、これはと思うテーマをいくつか考えて自信を持って先生に説明に行ったところが、真島先生はそれを見るなり、こんな研究はやる前からおよその見当は付いている、どうなるか判らないようなテーマを考えるように、という意味のことを仰って一蹴されてしまったという内容であった。あの赤堀先生にしても初めはそうであったのかと思うと、ちょっと気が楽になるが、いま面白そうに見えている研究というのは、先が見えていることが多いということだろう。

昨今のように何かあると「評価」が話題になると、誰もが手っ取り早い成果を求めたくなる。Nature誌にはすばらしい研究が掲載されることは確かではあるが、研究者人口の多い分野の論文が優先されることも事実である。時流に乗らない研究ははじめは不利であるかもしれないが、若い、特にアカデミックポジションにある若い研究者は冒険心を持って挑戦して欲しい。また、評価者になる機会の多い年輩者は、そのような研究をサポートすることを常に心がけるべきであろう。

はじめはそれと見えなくても、だんだん大きな体系ができあがってくるという研究の進め方にも魅力がある。碁の上手にかかると、それとなく打ってあった石がいつの間にか大きな意味を持ってくるように、局面を誘導して成果をつなぐ体系を作り上げることができればすばらしい。最近では日本の若手研究者のなかに、はっきりした自分の設計図を持って研究を展開している人たちが増えてきた。本誌5月号にもいくつかのすばらしい例が見られる。この傾向がさらに進むことを期待したい。

(2001年8月2日受理)